

「教育臨床総合研究 14 2015 研究」

小学校音楽科における「教育プロジェクト型アウトリーチ」の 授業開発研究

Instructional Development Research of Educational Project Model Outreach
Programs in Primary School Music Classes

松本 菜摘* 河添 達也**
Natsumi MATSUMOTO Tatsuya KAWASOI

要旨

本稿では小学校音楽科における継続性をもった演奏者との協働による授業内容と方法の可能性について考察を行う。中でも、第4学年で学習する「木管楽器」について、より効果的な授業の在り方について実践を通して言及した。生演奏の鑑賞や楽器体験、共演、そして2008年の学習指導要領改訂で新設された〔共通事項〕の音楽を形づくっている要素の一つである「音の重なり」を授業展開の軸とし、新たな授業デザインの一案を提示した。

〔キーワード〕 小学校音楽科 アウトリーチ 木管楽器 鑑賞

I はじめに

近年、教育現場でのアウトリーチがさかんに行われている。アウトリーチ (outreach) とは、英語で「手を伸ばすこと」と定義され、元々社会福祉の分野で行われる地域社会への奉仕活動、教育普及活動などの意味で用いられていた。現在では、現場へ出向いて活動する「訪問〇〇」「出前〇〇」といった受け手のニーズに合わせた取り組みも指すようになった。林 (2009) は、音楽分野でのアウトリーチ活動とは、音楽家や音楽団体などが音楽に普段触れる機会の少ない人々に働きかけ、音楽を普及することであり、さらに提供者と享受者が対等な立場で一緒に楽しむという双方向的なスタンスが特徴であると述べている。

また、学校教育にアウトリーチが普及するようになった背景として、1998年に告示された学習指導要領が一つの要因であると林 (2013) は述べている。本改訂に伴い、総合的な学習の時間と中学校音楽科で和楽器の導入が義務化され、外部人材の協力を得ながら授業を行う機会が増えたためである。

同じ1998年にはNPO法が施行され、芸術活動を主とするアートNPOが数多くのアウトリーチを提供するようにもなった。民間ホールを拠点に地域へのアウトリーチを行っている「トリトン・アーツ・ネットワーク」などがその先駆的組織として挙げられる。

* 島根大学大学院教育学研究科

** 島根大学教育学部芸術表現教育講座

このような時流を背景として、2000年代からプロのオーケストラもアウトリーチを盛んに行うようになった。東京フィルハーモニー交響楽団が実施している「こども音・楽・館」¹⁾や、広島交響楽団の「子どもたちと広響による音楽づくりコンサート」²⁾などが特筆される。

音楽大学におけるアウトリーチへの実践や研究も進み、津上(2013)では、2001年度後期から神戸女学院大学の授業として始まった「音楽によるアウトリーチ」の全体像について、詳細な報告がなされている。

島根県内でも、NHK交響楽団と島根大学、そして地域財団と学校の4者協働で行う「島根方式・教育プロジェクト型アウトリーチ」をはじめ、島根県民会館のオーガナイズによる「芸術家学校派遣事業」などが、年間を通して展開されている。また、島根県教育委員会は、2014年度から「第2期しまね教育ビジョン21」を策定し、学校・家庭・地域の連携をより一層主張しているが、その施策の一つとして、文化活動の推進や芸術鑑賞の機会の充実など、地域人材の活用を推進する必要性についても言及している³⁾。

本研究では、このようなアウトリーチ推進の現状を背景として、島根県で先進的に試行されている「教育プロジェクト型アウトリーチ」の考えを踏襲し、新たな可能性について考察を行う。中でも、小学校音楽科における「演奏者との協働による授業開発」に主眼を置いて研究を進める。

II 本研究の目的と方法

「外部から招聘する演奏者と学校との協働による授業開発」を主眼とすることはすでに述べたが、ここでは1回限りのアウトリーチ(通りすがりのアウトリーチ)ではなく、継続性をもった授業参画としてのアウトリーチを構想し、研究の対象とする。1回限りのアウトリーチは、結果として芸術鑑賞会や講演等の特別活動になることが多く、教科の授業参画にはなりにくい。本研究では、演奏者との協働によって可能となる、新たな授業デザインの可能性について実践的に検証し、その有用性や課題について省察することを目的としている。

まず、研究対象となる先行事例について文献調査を行い、これまで行われてきた協働型の授業内容を整理・分別する。その際、小学校音楽科の学習指導要領との関連や学校現場のニーズに注目し、現状における課題を明確化する。

また、島根県内の音楽家や音楽団体の所在分布を調査し、地域による偏りがなく、地域人材を活用しやすい状況であるかを概観する。さらに、松江市内の小学校音楽科教諭に聞き取り調査を行い、学校現場における協働型授業のニーズとその内容についてまとめる。

これらの調査・分析をもとに、新たな協働型授業を開発し、島根大学教育学部附属小学校第4学年で授業実践を行った。その実践を基に、演奏者との協働による新たな授業内容や方法に関する成果と課題について考察を行った。授業実践を行うにあたっては、事前に授業観察を重ねて、児童の学習経験や興味・関心事などの実態把握に努めた。

III 学校教育におけるアウトリーチの現状

1. 先行研究の分析

音楽科におけるアウトリーチを取り入れた授業実践について、資料や文献による調査を行っ

た。その結果、NPO 法人やオーケストラ、音楽大学など演奏者側の提案する実践例が多いことが明らかになった⁴⁾。また、教員側はアウトリーチに対して、概ね好印象であるが、不安や消極的な意識を抱いている状態であることも分かった。その理由として、梶田 (2011) や林 (2013) によると、次のような内容が報告されていた。

- ・教育活動や学習指導要領にどう位置づけて良いか分からない
- ・単発的なものが多く授業の前後をどう展開したら良いかが難しい
- ・評価規準の設定が曖昧になってしまう
- ・学習の進度に関して、共通理解が難しい

また、授業の実践内容は、単発・鑑賞型のものが多く、本研究で目指す継続開催による「教育プロジェクト型アウトリーチ」の実践報告は管見する限り殆ど見当たらなかった。

2. 島根県内の人材分布調査

島根県合唱連盟、島根県吹奏楽連盟、島根県オーケストラ連絡協議会における各地域の加盟状況を中心に分布調査を行った。その結果、隠岐地域を除いた主要地域において、団体活動を行っている演奏者の存在が確認され、島根県は、地域人材を活用しやすい状況であることが明らかになった。詳細は図1の通りである⁵⁾。この他にも、浜田市には現在 51 もの石見神楽の団体がある。

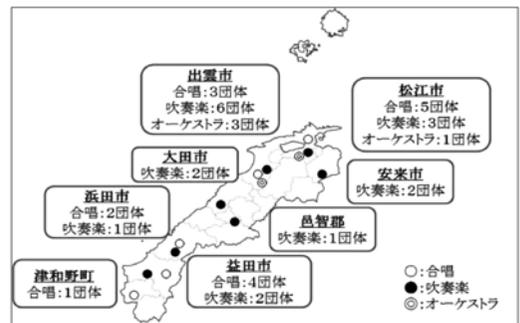


図1 島根県内の音楽団体の分布

3. 学校現場におけるニーズ調査

島根県松江市内の小学校音楽科教諭に、外部人材を活用した教育プロジェクト型アウトリーチに関する協働型授業のニーズ調査を行った。以下、学年ごとにその内容をまとめる。

	題材名	教材・学習内容	現在の課題	希望・要望
第一学年	けんぱんハーモニカをふこう	・音遊び ・アンサンブル	・ピアノを習っている児童と習っていない児童との意欲の差がある	・ソロやアンサンブルの曲集作成 ・概念を崩し、自由な発想へつながるような生演奏鑑賞
第二学年	いろいろな音にしたしもう	・音のカーニバル	・実物がないので音色との関連が図りにくい	・森の音楽隊 (チューバは象といったように、様々な楽器に動物を当てはめたもの) を招き、演奏を鑑賞
第三学年	日本の音楽にしたしもう	・壱行列 ・お囃子 ・ホーランエンヤ	・緩急の聴き比べで終わっている (神田・祇園囃子)	・地域と連携した学習
	いろいろな音色をかんとろう	・トランペット吹きの休日 ・ホルン協奏曲	・映像資料はあるが、学習教材として使用することが難しい	・生演奏の鑑賞 ・金管楽器の体験

第四学年	地域の民謡	<ul style="list-style-type: none"> ・ソーラン節 ・安来節 ・しげさ節 	<ul style="list-style-type: none"> ・身近な音楽である と子どもたちが感じ にくい 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域と連携した学習
	いろいろな音色を 感じ取ろう	<ul style="list-style-type: none"> ・バディネリ ・クラリネットポ ルカ 	<ul style="list-style-type: none"> ・映像資料はオーケ ストラ版なので、木 管楽器のみをクロ ーズアップして使うこ とができない 	<ul style="list-style-type: none"> ・生演奏の鑑賞 ・木管楽器の体験
	せんりつのとくちよ うを感じ取ろう	<ul style="list-style-type: none"> ・剣の舞 ・白鳥 	<ul style="list-style-type: none"> ・楽器が限定されて しまう 	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な楽器で旋律美を 中心とした鑑賞
第五学年	いろいろなひびきを 味わおう	<ul style="list-style-type: none"> ・双頭の鷲の下で ・威風堂々 ・アイネクライネ ナハトムジーク 	<ul style="list-style-type: none"> ・CDの鑑賞にとどま ってしまい、ひびき の比較などを行いにく い 	<ul style="list-style-type: none"> ・その場で演奏の人数を 変えたり、楽器を変え たりしながら鑑賞・共 演
	世界の音楽に親し もう	<ul style="list-style-type: none"> ・ヨーデル ・バグパイプ 	<ul style="list-style-type: none"> ・世界の民族楽器が 学校にない 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童が直接楽器を見 たり、音を出したりす る活動や民族楽器を用 いた演奏の鑑賞
第六学年	和音の美しさを味 わおう	<ul style="list-style-type: none"> ・この道 ・箱根八里 ・花 	<ul style="list-style-type: none"> ・映像資料が古い 	<ul style="list-style-type: none"> ・変声期の児童への指 導や男声合唱の鑑賞

協働型授業のニーズ調査だったのであるが、全学年を通して、映像資料はあるが学習教材として使うことが困難であることや一つの楽器をクローズアップしたものが少ないことなど、学校現場の課題を確認できたことは、予想外の収穫であった。このようなニーズの中から、松本が学部生時代に専門としていた木管楽器をピックアップし、演奏者との協働による授業実践を行って現状の課題を克服したいと考えた。

4. 附属小学校での授業観察

授業実践は松本が所属する島根大学教育学研究科の学校教育実践研究の一環として行うこととし、島根大学教育学部附属小学校第4学年1組で実施することになった。まずは、当該学級の授業観察を行った。本学級の児童は、3年時に金管楽器の学習を行っており、4年時に木管楽器の学習を行うことで、管楽器の全体像をつかむことになる。そして、第5・6学年で行われる吹奏楽やオーケストラの学習につながるものが想定されている。

児童は、聴き取ったことや、感じ取ったことを言語化する力に長けており、附属教員からのアドバイスもあって、「音色」に注目した授業案を考えることにした。そこで、学年の題材目標である「いろいろな音色を感じ取ろう」を学習課題に据えて、木管楽器の音色を中心に「生演奏の鑑賞」や「体験」、「共演」を行っていきたいと考えた。

先にも述べたが、本授業実践は、島根県で試行されている「教育プロジェクト型アウトリーチ」の考え方を踏襲している。そこで、実際の授業実践について述べる前に、島根方式と呼ばれる「教育プロジェクト型アウトリーチ」について実例を紹介するとともに、その特徴について整理してみたい。

Ⅲ 「教育プロジェクト型アウトリーチ」について

島根県では、2010年3月からNHK交響楽団と島根大学教育学部、(公財)しまね文化振興財団、そして学校の4者協働で行う「島根方式・教育プロジェクト型アウトリーチ」(以下、「島根プロジェクト」)の実施を試みている。

「島根プロジェクト」は、2010年3月以降、同年8月、2011年7月、2012年12月、2013年10月、2014年3月、そして2015年3月で6年目となり、計12校で実践されてきた。今後も実践の継続が計画されている。本プロジェクトは芸術鑑賞会ではなく、NHK交響楽団メンバーとの協働で行う「授業」である。対象学校で授業を行い、その学校の児童・生徒と教師を、アウトリーチ当日または翌日に島根県民会館で実施される同メンバーによる深化型コンサートへ招待し、「コンサート鑑賞」を行う。この「授業」と「コンサート鑑賞」の計2回のワークショップを行うことで、継続性をもったアウトリーチが実現し、学びの定着が企図されている。また、授業内容を演奏者に「お任せ」するのではなく、島根大学の教員と学校の音楽科教諭とが事前に話し合っ構想していることも、他に類を見ない特徴の1つである。音楽鑑賞会ではなく、最初から「めあて」をもった音楽の授業としてデザインされているのである。河添(2013)では、このようなアウトリーチを「教育プロジェクト型アウトリーチ」と名付け、さらに、演奏者・大学・地域財団・学校の4者協働の実施形態を「島根方式」と呼んでいる。

この「島根方式・教育プロジェクト型アウトリーチ」の具体的な授業内容は以下のとおりである。

題材名	小さな音の力強さを感じ取り、アンサンブルの魅力を味わう
題材目標	<ul style="list-style-type: none"> ・弱音のもつ力を感じ取ることができる。 ・アンサンブルの秘密を理解することができる。
対 象	島根県内の小・中学校
授業者	河添達也
協働者	NHK交響楽団メンバー(クラリネット、ヴァイオリン2名、ヴィオラ、チェロ)
授業の流れ	<ol style="list-style-type: none"> 1. 《クラリネット五重奏曲 1楽章》(W. A. モーツァルト作曲)を鑑賞する 2. N響メンバーによる自己紹介・楽器紹介 3. 子どもたち(リコーダー演奏)とN響メンバーとのアンサンブルを行う 4. アンサンブルの秘密を考える 5. もう一度、3.を行う 6. 紙回し(大きなトレーシングペーパーを、音をたてないように子どもたち同士で回す)を行う 7. N響クラリネット奏者の山根孝司によるpp→ppp→pppp→ppppppとダイナミクを変化させた同曲の演奏を鑑賞する 8. アンサンブルの実際を間近で鑑賞する(写真1) 9. (演奏者にお礼の気持ちを込めて)子どもたち全員で合唱をする

3. では子どもたちが《クラリネット五重奏曲》のクラリネット・パートをリコーダーで演奏し、N響メンバーとアンサンブルを試みる。しかし、なかなか子どもたちは合わせることができない。

4. で、なぜN響メンバーのアンサンブルは緻密なのかを子どもたちで考え、「目」と「耳」、そして「呼吸」が深く関わっているのだということに気づいていく。その後もう一度アンサンブルを行うと、子どもたちのアンサンブルに対する精度に向上が見受けられ、アンサンブルの秘密への理解

が深まっている様子がかがえた。6. を行うことで、さらに聴覚は研ぎ澄まされ、7. の鑑賞では、ほとんど息音のみになっても、子どもたちはしっかり聴取できている。

このような「聴き合う」ことの大切さを学ぶことで、授業後の「コンサート鑑賞」では、アンサンブルの魅力を味わいながら鑑賞することができるのである。

この、「島根プロジェクト」を参考とした、新たな演奏者との協働による授業開発実践の実際について次節で詳述する。



写真1 鑑賞の様子

IV 授業実践

題材名 木管楽器ってなんだろう？

～クラリネット、フルート、オーボエ、ファゴットのひみつ～

題材のねらい

- ・木管楽器の音色を感じ取り、思いや意図をもって表現することができる。
- ・木管楽器の仲間を知り、音色や仕組みの違いについて理解することができる。

実施日 2014年12月2日(火)3校時, 8日(月)1校時, 15日(月)1校時

対象 島根大学教育学部附属小学校 第4学年1組

授業者 松本菜摘

協働者 島根大学教育学部音楽教育専攻の学生
附属小学校指導教員 神門洋子教諭

1. 題材について

本学年の児童は、第3学年時に金管楽器について学習している。今回木管楽器の学習をすることで、第3・4学年を通して、管楽器の全体像を学習することとなる。

第4学年の題材目標にもなっている「いろいろな音色を感じ取ろう」を学習の中心に置き、演奏者との協働によるアウトリーチを取り入れた。本授業実践では、島根大学音楽教育専攻の学生に木管楽器の演奏者としての授業参画を依頼した。また、楽器体験などアウトリーチならではの活動を取り入れ、木管楽器の音色や仕組みについて児童の体験的な理解を図りたいと考えた。

2. 児童について

本学級は男子 16 名，女子 14 名の計 30 名で構成されている。男女ともに仲が良く，明るい学級である。音楽の授業に対して意欲的な児童が多く，聴き取りや感じ取りについて発言できる児童も多い。

10 月の本番に向け行われた連合音楽会の練習でも，自主的に様々な振り付けを考えるなど演奏への工夫も見られた。しかし，練習過程では意見が合わず衝突する場面や熱心に取り組む児童とそうでない児童，演奏が得意な児童とそうでない児童など，意欲や技能の個人差が見受けられる場面もあった。

そこで，本題材では，体験的な活動を通し，児童一人一人が自分なりに解釈したり，他の児童と意見を共有したりできるような指導を目指した。発表やワークシート記述の活動を取り入れ，一人一人の意見を教師が把握するように留意した。また，「クラリネットは木でできているから，木のあったかい音がした。」など，楽器の素材や仕組みと音色を関連付けて理解できるよう促した。

3. 評価計画

評価の観点と評価規準

	ア 音楽への 関心・意欲・態度	イ 音楽表現の 創意工夫	ウ 音楽表現の 技能	エ 鑑賞の能力
歌唱				
器楽				
音楽づくり				
鑑賞	○			○

題材に即した具体の評価規準

	ア 音楽への関心・意欲・態度	エ 鑑賞の能力
題材の 評価規 準	木管楽器の音色の違いや音の重なり合う響きに関心をもって，進んで聴いたり演奏したりしようとしている。	いろいろな楽器の音色や楽器の重なり合う響きを感じ取りながら聴いている。
学習活 動に即 した評 価規準	木管楽器の音の特徴や仕組みの違いに関心をもって深く理解し，進んで聴いたり活動に取り組んだりしている。	木管楽器の音色の違いや美しさを感じ取り，それを言葉やジェスチャーなどで表して，楽曲の特徴や演奏のよさに気付いて聴いている。

題材の指導と評価計画（全3時間）

次	時	ねらい	主な学習活動	評価	評価の方法
1	1	クラリネットの音色を感じ取る。 クラリネットの種類や仕組みについて知る。	・クラリネットの鑑賞 ・クラリネットの種類 の学習	ア	・観察 ・発表 ・ワークシート
2	1	クラリネット以外の木管楽器の仲間（フルート、オーボエ、ファゴット）について知る。音色を感じ取る。	・楽器の音色について ・楽器の仕組みについて ・楽器体験	ア	・観察 ・ワークシート
3	1	学習した木管楽器が重なるとどのような演奏になるのか感じ取る。 既習曲を用いて比較しながら音色を感じ取る。	・生演奏の鑑賞 ・楽器当てクイズ ・木管楽器の比較、重なり	エ	・観察 ・発表 ・ワークシート

4. 授業の実際と児童の様子

— 1時間目 —

1時間目は、木管楽器の中でもクラリネットを導入として取り上げた。楽器名を知っている児童は多かったが、音色や仕組みまでは知らない児童がほとんどだった。リードをつけずにB♭クラリネットを筆者が吹き、音を出すためにはリードが必要であることを全体で確認した。用意した何枚かの大中小のリードを見たり触ったり、近くで観察した後、リードの大きさによって使用される楽器の大きさが違うことを伝え、B♭クラリネット（中）→E♭クラリネット（小）→バスクラリネット（大）の順に演奏し、音色の違いを感じ取らせた。児童からは、「E♭クラリネットはハキハキしていて、元気が出た。」「バスクラリネットは味が深い感じ。」などの意見が出た。

その後、クラリネットの音の出る仕組みについて説明した。「リード」と「吹き口」がないと音が出ないということを理解させ、B♭クラリネットで《Immer Kleiner》（A. シュライナー作曲）を演奏した。吹きながら徐々に楽器を分解していくよう指示がある曲で、クラリネットがたくさんのパーツからできていることや、最低限「リード」と「吹き口」があれば音が出ることを理解できるようにした。ここでは、音色というより仕組みに注目して聴いている様子が見えかけた。

— 2時間目 —

島根大学教育学部音楽教育専攻のフルート、オーボエ、クラリネット、ファゴットの学生4名に授業参画を依頼した。一人ずつ各楽器の紹介と説明をしてもらい、同じ木管楽器でも音の出る仕組みが違うことを子どもたちに理解させた。また、その楽器に関する興味が高まったところで、短いフレーズを実際に演奏し、楽器構造に関する座学と聴取体験の融合による学習内容の定着を図った。

各楽器の音色や仕組みを理解した上で、児童自身による楽器の演奏体験を行った（写真2）。1時間目の時から、楽器を吹いてみたいという児童が多く、積極的に体験を行っていた。「息

がたくさん必要だった」「思ったより楽器が重かった」など、実感を伴った学習成果がうかがえた。

— 3 時間目 —

島根大学教育学部音楽教育専攻のフルート2名、オーボエ、クラリネット、ファゴットの学生5名に授業参画を依頼した。前時までは、一つ一つの楽器の音色や仕組みの学習であったが、本時では中学年で新たに加わった〔共通事項〕の一つである「音の重なり」について学習した。

まず始めに、楽器当てクイズを生演奏で行い、各楽器がどんな音色だったのかを復習した(写真3)。これは、演奏者が後ろを向いて一人だけが演奏し、他の奏者は吹き真似をして、だれが吹いているかを当てるクイズである。演奏動作が見えないので、児童は聴覚を研ぎ澄まし、「音色」のみを頼りに、どの楽器なのかを判断しなければならない。さらに、その演奏者を2名に増やし、2種の楽器の音の重なりを傾聴させるクイズを行って、本時の導入とした。フルート2本→クラリネット2本→フルートとクラリネットの順に比較聴取を促し、音色の違いに気づかせ、自分の好きな組み合わせを考える活動を取り入れた。「フルートははっきりしていて、クラリネットはぼんやりしている。」「フルートとクラリネットと一緒に吹くと両方の良いところが出る感じ。」などの意見が出た。その後、演奏者全員で《となりのトトロ・メドレー》(久石譲作曲)を演奏した。この曲はメロディや伴奏が移り変わるので、木管楽器の音の重なりの変換を体験でき、各楽器の役割についても聴き取りやすい。最後に児童が音楽会のため練習している《レット・イット・ゴー》(R. ロペス作曲)を児童と演奏者とで共演し、授業を終えた。



写真2 楽器体験の様子



写真3 楽器当てクイズの様子

V 考察

本稿では、木管楽器の理解を題材とする学習において、演奏者が協働参画することで可能となる授業開発の一例を報告した。本授業実践を行ってみて、「教育プロジェクト型アウトリーチ」の有用性を、改めて確認することができた。それは、「なま」の音に触れる体験や奏者との同時双方向的なやり取りができること、そして実際に楽器に触れて音を出す体験ができることなどの利点についてである。児童の興味や関心を高めることもでき、主体的な学習を促すこともできたと思われた。また、Ⅲ-1でまとめた教員側の課題提示に対しても、ある程度の解決策を示すことができたと考えられる。

しかし、本研究の目的は、そのような学習成果の質的向上を検証することではなく、演奏者との協働によって可能となる授業展開の多様性について、複数の具体的な提案を行うことに

あった。例えば、「音の重なり」の学習場面において、重ねる楽器の数を児童の理解度に合わせて瞬時に増減させたり、聴き取りやすいように速度を落として反復演奏したりすることなどは、演奏者との協働によって初めて可能となる授業展開である。演奏家任せの鑑賞型アウトリーチでは実現できない、教師主導の授業展開の豊富化を提案し、授業の題材や目的に沿ったこれまでにない授業の可能性について、実践を通して提示していかねばならない。そのためにも、さらに多くのニーズを掘り起こし、様々な授業デザインを提案して、具体的な実践に還元していきたいと思っている。

引用・参考文献

- 1) 林睦 (2009) 「音楽のアウトリーチ活動に関する一考察—日本における導入 10 年と今後の課題」『音楽教育学の未来』音楽之友社, pp. 280-290.
- 2) 林睦 (2013) 「音楽教育におけるアウトリーチを考える—基本的な考え方, 歴史的経緯, 最近の動向」『音楽教育実践ジャーナル』vol. 10 no. 2, pp. 6-13.
- 3) 石見市観光協会 「石見之國伝統芸能—石見神楽団体リスト」インターネット, http://iwamikagura.jp/modules/iwa_hitobito/content0002.html (2015/03/23 にアクセス)
- 4) 梶田美香 (2011) 「転換するアウトリーチ—音楽科教育への貢献—」名古屋市立大学博士論文.
- 5) 河添達也 (2013) 「ウィーン交響楽団の教育プロジェクト型アウトリーチ—島根県での 4 者協働方式への援用を試みる—」『音楽教育実践ジャーナル』vol. 10 no. 2, pp. 21-28.
- 6) 島根県教育委員会 (2014) 「第 2 期しまね教育ビジョン 21」島根県教育委員会.
- 7) 鈴木香代子 (2010) 「学校と演奏家の連携による音楽教育の可能性—アウトリーチ活動の事例を追って」『音楽教育実践ジャーナル』vol. 7 no. 2, pp. 88-100.
- 8) 津上智実 (2013) 「神戸女学院大学のアウトリーチ教育と 3 大学連携—『コミュニケーションとしての音楽』再発見の試み」『音楽教育実践ジャーナル』vol. 10 no. 2, pp. 29-36.
- 9) 広島交響楽団 (広島交響楽協会) (2005) 『オーケストラと出会おう! 水, 光, 風』広島交響楽団・広島交響楽協会 [DVD].
- 10) 文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領解説 音楽編』教育芸術社.

¹⁾ 2002 年度から実施されており, 文化庁巡回公演やファミリーコンサートなど音楽を通じたさまざまな教育プロジェクトを展開している。詳しくは以下の URL を参照。

<http://www.tpo.or.jp/education/>

²⁾ 2004 年 6 月から実施されており, 広島県内の小学生たちとの協働によるワークショップやコンサートを開催している。詳しくは以下の URL を参照。

<http://hirokyo.or.jp/info/katsudou/kansho>

³⁾ 「第 2 期しまね教育ビジョン 21」p. 38, 43 参照。

⁴⁾ たとえば林 (2013) など。

⁵⁾ 個人は多岐に渡って活動をしていて, その存在は大きい。また, 和楽器に関しても同様である。しかし, 全県的な組織が見当たらないため, 本研究では各連盟の所属団体に限定し, 調査を行った。